大人にだまって城下町を抜け出した駒場一郎と幼なじみの志木三太は、同行した剣術修行の仲間と共に隠し金山にたどり着き、水瀬十蔵の救出に取りかかっていた。

十蔵が落ちた谷底へ下りる、きけんな役目を買って出たのは一郎である。仲間の中で一番小さな体に巻きつけた命づなを、三太は先頭に立って支えた。

「駒場、大事ないかっ」

「だいじょうぶだよ。そのままおろして！」

けわしいがけを下りながら顔を上げ、三太に答える一郎の声はいつもと変わらず元気いっぱい。まるい顔をこわばらせてはいるものの、あわてずに足場をさがす表情は剣術を学ぶときと同じく、真剣そのものだった。

（たのむぞ駒場。水瀬先生はおれにとってもだいじなお方……何としてもお助けし、今度こそおぬしと共に学びたいのだ……）

胸の内でつぶやく三太を先頭に、少年たちは汗まみれで命づなを支え続ける。ようしゃなく照りつける日射しに肌をじりじり焼かれながらも、手を抜く者はいなかった。

入道雲におおわれた空の下、谷底にひろがる森はぶきみなほど静まり返っていた。

この山間の小さな藩では植林も大事な財源だが、山の奥深くまで人の手は入っていない。のびほうだいの枝に青々と葉が生いしげり、きつい日射しをさえぎっていた。

横たわったまま動けずにいる十蔵にとってはありがたい反面、これでは助けに来てくれた者が上から見ても、どこにいるのか見当もつかないだろう。

「伏して死を待つのみ……だな」

覚悟のつぶやきをもらす十蔵の正体は江戸の徳川将軍家に仕え、諸国の藩を治める大名たちが知られたくない秘密をあばく御庭番。藩主の側近をつとめる井坂多門の屋敷に居候として入りこみ、一郎ら家中の少年たちに剣術を教えながら一年にわたって、この藩がひそかに財源とする隠し金山の場所をさぐり続けてきた。

正体がばれれば、ぶじではすまない役目である。

命がけの隠密御用に十蔵が志願したのは、五年前に同じ役目をおおせつかり、江戸に戻らなかった父親のゆくえを知るためでもあった。

一郎に御庭番であることを知られてしまい、江戸に逃げ帰る前に隠し金山の場所だけはたしかめたものの、家老の息子でかねてより十蔵を疑っていた加納兵馬に待ち伏せをされ、けちらして逃れる途中に足を踏み外して、がけから落ちてしまったのだ。

今にして思えば、ばちを当てられたのかもしれない。

井坂家の人々にとって、御庭番は藩を危うくする悪しき存在。十蔵の思わぬ裏切りに今頃は怒り、あるいはなげき